

[研究論文]

## Michael Drayton の数秘術

大木 富

基礎・教養教育センター

## Numerology in Michael Drayton

Tom OHKI

## Abstract

My aim in this paper is to consider the numerology in Michael Drayton's sonnet sequence, *Idea. In sixtie three sonnets*(1619). Fowler(1970) points out his use of numerology in "To the New Yeere", *The Shepards Garland* and *The Barons Warres*, and gives a brief reference to the numerological structure of *Idea*. However, neither Roche(1989), a comprehensive study of numerological structures in the sonnet sequences, nor Røstvig(1994), a detailed analysis of numerical composition in medieval, Renaissance, and baroque literature, does not even mention this question. The first section deals with the complex and intricate symbolism of the circular number 9—the basic structural number of this sequence consisting of 63 sonnets. The second section attempts to analyze the numerology of the symbolic circle of *Idea*, Drayton's sonnet lady, created by three sonnets (sonnets 32, 39 and 53). The third section discusses the meaning of the symbolic number 8 found in the sonnet total of *Idea* as a whole, including the prefatory sonnet "To the Reader of these Sonnets" (i.e.  $1+63=64$ ). The final section treats his use of other symbolic numbers in sonnets 15, 33, 35, 39, 40, 50, 60.

Key Words: Number symbolism, Circular number, Symbolic Circle, Sonnet sequence

Michael Drayton(1563-1631)が1594年に *Idea's Mirror* のタイトルのもとに出版した全52篇のソネット連作(献詞のソネット+連作本篇51)は、その後1599年にタイトルを *Idea* と改め、全59篇とされ、さらに1600年版で全66篇、1602年版で全67篇、1605年版で全69篇(序詞のソネット+本篇に先行する読者に宛てた2つのソネット+本篇67)というように度重なる修正の手が加えられ、1619年の決定版で全64篇("To the Reader of these Sonnets"と題された序詞のソネット+本篇63)という形に落ち着くこととなる。本論はこの1619年決定版 *Idea. In sixtie three sonnets* における Drayton の数のシンボリズムの使用を検討するが、その際、初版等の各版を含めて詩の総数を問題とする場合、ソネット集であるという観点から、本篇のみならず詩集全体としてそこに収められているソネット形式をとるすべての詩をその構成要素と考える(以下、特に明記しない場合は1619年決定版を *Idea* として言及し、そのソネット番号の記載に当たっては *Id* と略して記載する)。

Drayton は Sir Philip Sidney(1554-86)を1594年初版 *Idea* の献詞のソネットの中で「天与の才に恵まれたる詩人」"Divine Syr Phillip"と称し、Sidney の影響を示唆しているが(Roche(1989:243)), Evans(ed.)(1977:xxv-xxvi)は改訂版ごとに Sidney の *Astrophil and Stella*(1591)の影

響が顕著なものとなっていると述べ、両ソネット連作所収の各詩の対応関係を示している。数のシンボリズムの面からは Fowler(1970:176)が1619年決定版の *Idea* 本篇のソネットの総数63に *Astrophil and Stella* に用いられている数秘術と同じ数のシンボリズムの使用を指摘している。加えて Fowler(1970:147)は当時慣習化していた新年の贈り物としての「新年の歌」というジャンルに属する Drayton のオード "To the New Yeere"(1619)の総詩行数84に新年の数8のシンボリズムを認め、また *The Barons Warres*(1603)に付された序文での8行連句の擁護の中に、詩の数的構成によってその詩を謂わば1つの建造物とする数秘術、また宗教的・文学的著作の巻数に数の象徴的意味を反映させる伝統に対する意識がうかがえるとしている(Fowler(1970: 18-19, 187n))。しかしながら、エリザベス朝のソネット連作における数のシンボリズムに関する包括的な研究である Roche(1989)にしても、古代から18世紀に至るまでの主要な文芸作品における「数の隠された意味による構造」を十全に解明している Røstvig (1994) の場合も、Drayton の数秘術の使用に関する分析はほとんどなされていない。

本論は、数9の伝統的象徴としての意味を中心とした数論を展開している *Id* 18を糸口として、*Idea* 本篇が数9のシンボリズムによって成立していることを解明し、さらに詩集全体としてはそこに数8の象徴性が反映



されていることを検証することを通して、*Idea*における Drayton の巧妙且つ複雑な数のシンボリズムの使用を出来る限り明らかなものとしようとするものである。

Drayton は Edmund Spenser(1552/53-1599)の *The Shepherdes Calender*(1579)に刺激されて、1593年に9つの歌から成る牧歌 *Idea, the Shepherds Garland, Fashioned in nine Eclogs* を著しているが、1606年、1619年と改訂の手を加え、最終的に全体の歌の総数を9篇から10篇に変更している。その初版の最終箇所にもその影響を認めている Spenser に対する敬意と賞賛は終生変わることがなかったが、*The Shepherdes Calender*に限らず Spenser の詩作品における数のシンボリズムの使用は今や周知の事実である。また、この牧歌というジャンルを確立した人物にして、ルネッサンス期において模倣すべき模範・規範であると見なされた Vergilius(70-19B.C.)の *Eclogae* 全10歌の数的構成に数のシンボリズムが用いられていることは、Maury(1944)が見出した数333の象徴性をはじめとし、Fowler (1970:93-94)を含め、Otis(1964)等によって詳細な分析が示されている。Fowler(1970:147)も *The Shepherds Garland* の第1牧歌の総詩行数に先の数84のシンボリズムを読み取っているが、そのことからおそらくは Spenser や Vergilius の数のシンボリズムを駆使された牧歌の影響を受けていると想像されるこの作品の構成にも、象徴としての数9に対する Drayton の意識が、それもとりわけ1619年版において牧歌の総数が9から10篇に改訂されていることに *Id* 18に明言されている数のシンボリズムが示されているという印象を強く与えられる。

### 1. 循環数9のシンボリズム

*Idea* において Drayton が数のシンボリズムを意識して詩作していたことは、1599年版以降 “To the Celestiall Numbers” と題されている *Id* 18に少なくとも明確に示されているが、この詩は聖数すなわち9を中心とした数論を基盤として展開する。この数9のシンボリズムの使用は、1594年初版では8番に置かれていた *Id* 18が、当初 Julius Caesar(100-44B.C.)などを含めた所謂「九英傑」に比肩するものとしたために、恋人 *Idea* をその10番目に相当するような男勝りの英雄・偉人としているなどの誤解に基づく批判を受けたことから、*Endimion and Phæbe. Ideas Latmus*(1595)の第881から974行目にかけて本筋から脱線した「数9の神聖性に関する論考」をその自己弁護・正当化（特に第901から904行目）として挿入していることから裏付けられる。このような反論の意志は、そのタイトルからして “To the Criticke” である1599年第2版から追加され、1619年決定版でも同じく第31番目に置かれているソネットで、「人を嘲る、心のゆがんだ物まね師 “crooked Mimicke”(1)である批評家は「平凡で低級な意想 “ev’ry Duden low Invention”(8)しか理解できないと批判していることに明らかである。

### 18

To this our World, to Learning, and to Heaven,  
Three Nines there are, to every one a Nine,  
One number of the Earth, the other both Divine,  
One Woman now, makes three odde Numbers even;  
Nine orders first of Angels be in Heaven,

Nine Muses doe with Learning still frequent,  
These with the Gods are ever resident;  
Nine worthie Women to the World were given:  
My worthy, One to these Nine Worthies addeth,  
And my farie Muse, one Muse unto the Nine,  
And my good Angell (in my Soule divine)  
With one more Order, these nine Orders gladdeth:  
My Muse, my Worthy, and my Angell then,  
Makes every One of these three Nines a Ten.

冒頭で語り手は、伝統的な宇宙の3区分・3層論に基づいて、宇宙を天使たちが9つの位階をなしてその頂点に至高の神をいただく、Platon(428/427-348/347B.C.)のいうイデアの世界・叡智界、その下の9つの惑星の天球層から成る天空の世界、地上の感覚的・元素的世界に分け、その各世界が9で代表されていると切り出す (Heninger(1974:341-43, 367))。その際、天空界が学問・芸術の世界とされているのは、その世界の観照を通して人間の魂・精神あるいは理性が肉体的次元を越えて霊的次元へと昇華してゆく人間の知性的・思弁的世界に対応するからである。またその世界にギリシャ神話の9柱の女神が割り当てられているのは、各天球の惑星が神々と同一視されることを踏まえて、天空の世界を9で擬人化して象徴するものを選択したためであり、確かに、神の計画に則って創造され、美しく整然とした秩序をもち、神の完全なる調和を映して「天球の音楽」・「宇宙の和声」を奏でる各惑星が、9柱の女神のそれぞれと同一視される場合もあった (Heninger(1974:181-82, 373))。また、地上界を代表する「9人の女性賢者」“Nine worthie Women”(8)であるが、これは1594年初版で伝統的な「九英傑」“Nine worthy men”とされていたものが、1599年版以降このように変更されている。この変更は *The Shepherds Garland* での「九英傑」として象徴される人物たちには、男女の性の別を問わない、数9の聖なる数としてのシンボリズムが示されているのである (931-40)という反論を反映したものと言える。このように、*Id* 18では nine の語を総計9回繰り返すことによっても暗示されているが、恋人 *Idea* を象徴するものとして数9それ自体のシンボリズムが問題とされていると考えていい。

数は万物の原理であり、それによって宇宙は秩序立てられており、すべての数はモナド（1なるもの）から生じる。このピュタゴラス派の数論が Platon のイデア論の基礎となり (Heninger(1974:295-96)), Augustinus (354-430)によりキリスト教化されてゆく中で、古代からの聖数3が「神の一性」・「1なるものとしての神」を表す数と見なされていった。その観念は、数3ははじまり、中間、終わりをもつものとして、中間がその前後を結びつけ、単一性へと統合されるという数論を基礎とする。この三一性を表す3が、神の完全なる被造物に反映されているのである。「1者である神」が3位格で表されるように、「1なるもの」をたやすく理解することができない人知にとって、3の方が、さらに3×3としてその3を唯一の根とする9の方がより理解しやすいのであり (Hopper (1938:106, 138)), すなわち数9は神の一性、第1原因としての神、つまり1を反映しているのである。

反面、神の被造物の完全性は神自体の完全性に比べれば二次的であり、数9は神性の単一性を補足しなければ



完全数 10, 神的計画の本質を成す数をすべて含むデカド (= 10) に至らないことを示すものでもある (Hopper (1938:106)). 従って, 中世において天使の位階も 9 から墮落以前の 10 へと回復されなければならないと考えられた. モナド (単一性・1者・1なるもの) から数 4 まだが生じ, その 4 つの数から数 10 を限度として派生したもの ( $1+2+3+4=10$ ) が宇宙・万物であり, 10 よりも大きい数はすべてデカドの構成要素によって生み出されたものであることから, 1 から派生したすべての数を包含する 10 は単一性への回帰を表す (Heninger(1974: 84); Hopper(1938: 43-45, 102)).

*Id* 18 の第 4 行目の「恋人 Idea という 1 が, 3 つの 9 という奇数を偶数とする」という数論は, それ以降の解説をまとめて最終のカプレットにおいて, 1 である恋人が神の創造した, 3 世界からなる宇宙のそれぞれを構成する数 9 を, その 3 つの世界に対応して「我が詩神, 我が賢者, 我が天使」である恋人が, 「10 = デカド」とすると説明される. この 1 者にして 3 者である恋人 Idea とは, すなわち三位一体であると言えよう.

数のシンボリズムの伝統の中で, Dante(1265-1321)は *La Vita Nuova*(1292-93)において永遠の恋人 Beatrice を「数 9 そのものである」(XXX, 26-27)とし, それは  $3 \times 3$  として三位一体の数を唯一の因数とする数 9 によって, Beatrice が三位一体つまりは神性の単一性=完全性を示す「奇跡」であることを表しているからであると語っている. Dante の恋人 Beatrice と同様に, Drayton の三位一体なる恋人 Idea は, 万物の原型としてのアイデア, 始原としてのモナド, 第 1 原因としての神を現世において映す真の鏡なのである. その意味ではまさしく 1619 年版の Idea と称される女性は, このソネット連作の当初の表題通り「アイデアの鏡」なのである.

9 柱の女神を語り手自身の詩神が凌ぐ存在であることを 9 と 10 の数を用いて表現することは, Drayton の独創ではなく William Shakespeare(1564-1616)の *Sonnets*(1609)にも確認できる. Shakespeare は第 38 番のソネットで「詩神への呼びかけ」の伝統に基づいて, まさしく語り手が愛する美青年の友人こそが永遠なる詩を生み出させる靈感・詩想の源泉であることを, この友人を「9 柱の女神を 10 倍凌ぐ 10 番目の詩神」“Be thou the tenth Muse, ten times more in worth/ Than those old nine which rhymers invoke” (9-10)と語ることによって表している.

後述するように, Idea にはキリストとのアナロジーを伴った宗教的イメージを用いている一連のソネットがある. その内の“To Miracle”と題される *Id* 35 では文字通り「恋人 Idea の為した奇跡」が列挙されているが, 「9 を 10 とする恋人 Idea」とは, 逆に彼女自身が Beatrice 同様に 1 つの「奇跡」として, 神のあらゆる被造物の中に存在する数 9 を遙かに凌いで, 完全なる 3 (三位一体) = 神の単一性 (= 完全性) を反映する 9 であるという意味である. そのことを, *Id* 18 の 10 行目「我が美しき詩神は 9 柱の女神にもう一人の詩神を加える」が, 「詩行の序数によるシンボリズム」を用いて表していると言える.

さて, このソネット連作本篇の冒頭に置かれた“To the Reader”と題された序詞を見てみると, その第 9 行目で, 語り手は読者に対して「我が詩は我がまことの心像を写したもの」“My Verse is the true image of my Mind”としている. 恋人 Idea への愛を語る詩において, 語り

手の詩神である恋人 Idea が詩作の材料を与えてくれるのであり, 語り手の精神活動の中心は恋人への愛が位置していることは言うまでもない. この序詞 9 行目の言葉をそれが語られる詩行の序数とともに, *Id* 12 で魂の機能を 9 つとして言及していることと照らし合わせて考えれば, 語り手の精神の真の姿, 恋人への愛の真実が数 9 で象徴されていると言えよう. 確かに, 伝統的に数 9 は精神・霊性を表す数と考えられた (Fowler(1964:269-70;Roche(1989:351))). また, 心は恋人の姿が刻印されている, あるいはそれが祭られている神殿であるというのは Francesco Petrarca(1304-74)以来のソネットの常套であるが (John(1938:99-103)), “To Imagination”のタイトルを持つ *Id* 33 ではまさしく心の中に恋人の姿が留められているという観念がテーマとなっている. すなわち, 序詞 9 行目の「我が心の誠の心像」とは, 文字通り語り手の精神の真の姿であると同時に, 心に刻印された恋人 Idea の像を意味し, その両者を表したものであるソネット連作 Idea 本篇を含めてそのすべてが数 9 によって象徴されていると言える.

さて, この数 9 には, 伝統的象徴としての意味として, 上述した Beatrice, 天使の 9 つの位階等の他に循環数としての意味がある. 中世においてアラビア数字がヨーロッパに導入されるのにもなって, それまで循環数・円環数と認められていた数 5 や 6 に加えて, 数 9 もそのような数であると思なされるようになった. 数 5 や 6 は, 累乗すると 25, 36 などのように下一桁目に基数 5, 6 が繰り返されることから, 常にそれ自身に回帰する, 循環数と考えられ, その累乗は円・球の図形に対応するとされた (Hopper (1938:102)). 数 9 の場合は, その他の数と何度掛け合わせようとも, 何回累乗しようとも, その結果得られた数の各桁の合計が 9 となることから, 同様に循環数と思なされた ( $9 \times 7 = 63 = 6 + 3 = 9$ ). 例えば, Andrew Marvell(1621-78)の“Upon Appleton House, to my Lord Fairfax”においては, 数 5 の循環数としての意味が, 数 5 のさらなる象徴性と, 数 8 の象徴としての意味の多義性ととともに同詩の巧妙且つ複雑な数のシンボリズムを成立させている (大木(1999)).

この循環数 9 のシンボリズムの観点から Idea 全体を眺めてみると, 9 の倍数を序数とするソネットは *Id* 9, 18, 27, 36, 45, 54, 63 の 7 つであり, それぞれの詩の中で数 9 が提示され, その序数が循環数 9 の倍数として 9 に還元されることを示唆する.

そこでまず注目されることは, 循環数 9 のシンボリズムによって Idea 本篇の総数 63 が 9 に還元される, すなわち本篇が 9 で象徴されるということである. ただし, 数 63 自体にも伝統的象徴としての意味があり, 先に触れたように Fowler(1970)はそのシンボリズムが Idea 本篇の総数に反映されていると考えた.

数 63 は精神と肉体の両面における危機的段階, 大厄年を表す数と考えられ, 7 が肉体を 9 が精神を表すことから 49 が肉体の, 81 が精神の危機をそれぞれ意味するとされた (Butler(1970:145);Roche(1989:351)). Fowler (1970:176)はこの意味での数 63 の使用を, Sidney の *Astrophil and Stella* の数的構成の中に, また Henry Constable の 1592 年版 *Diana* 及び Drayton の Idea 両作品を例として, 1 つの完結したソネット連作の詩の総数に見ることができると指摘している. ただし, Constable の場合は, 連作冒頭に“The order of the booke”と題した,



全体を3部に分け、それぞれが7つのソネットから成るという数的構造に関する入念な解説を付し、意識して数63のシンボリズムを用いていることが明言されている。一方、Drayton に関しては、Id 12で魂の機能を9つとしていることに数9のシンボリズム「精神」に対する意識が十分表されていることを根拠とし、序詞の9行目をこの作品の趣旨表明と解し、語り手の心のありのままの姿、恋人 Idea への愛の実状を歌うソネット連作を象徴する数として、その詩の総数を63としていると考える。

Idea 全体としては恋人 Idea に対する語り手の報われぬ恋が歌われており、結びの Id 63においても、恋愛を戦争にたとえるコンヴェンションを用いて (John(1938: 60ff)), 愛の苦悩からの解放を愛神との和平交渉という形で歌うが、「死以外は、あなたの要求に叶わないのなら」“Or if no thing but Death will serve thy turne”(9)、愛に死すことも辞さないと愛神に訴え、詩を結ぶ。恋人の別れを切り出す Id 61、報われぬ恋の苦しみをオクシモロンによって強調して歌う Id 62からここ Id 63に至って、語り手の苦悩はその頂点を迎えている。その意味で、精神と肉体の危機を表す数63はその数を序数とするソネットの内容を象徴する数として相応しい。

この数63の象徴としての意味「危機」の使用は、同じ意味を表す数49のシンボリズムが Id 49に用いられていることから裏付けられる。Id 49では、魂を浄化する「煉獄」“Purgatorie”(12)、肉体的死のイメージを用いて、つれない恋人に対する語り手の恋の苦しみを死にたとえてそれを恋の試練として歌うというコンヴェンションに従っており、やはり数49で象徴されるのに相応しい。

このように数63はそれ自体の持つシンボリズムによって Id 63の内容を象徴するだけでなく、Fowler(1970)の指摘するように、このソネット連作の枠組みとしてその象徴性を発揮していることも事実であるが、その場合でも根拠とされたのは、数9のシンボリズム「精神」の存在であった。数63は循環数9の倍数として数9へ帰帰するものであり、その数9が表すシンボリズムに関しては先の Id 18の分析で確認した。すなわち、数9によって恋人 Idea 等を象徴するために、あるいはそれを示唆するために、数9の持つ循環数の意味を用いてソネット連作 Idea の本篇を構成していると同時に、詩集自体を9で表象していると考えられる。そして、その循環数のシンボリズムの使用は、63以外の9の倍数を序数とするソネットでは、やはりその序数が循環数9であることを示していることに確認されるわけである。

そこで、残りの9の倍数を序数とするソネットの内、循環数9のシンボリズムと同時に、これもまた伝統的象徴としての数である3角数の象徴性も併用されている Id 45から見てゆくことにしよう。

ピュタゴラス派の数論によれば、1から順に加算していった合計は、それぞれその算術級数の最終項を底辺とする3角形を形成する3角数であるとされ、主に聖書解釈に適用・発展させられた中世の数の寓意的解釈においては、3角数はその意味をその底辺を構成する数に還元して解釈される完全数と見なされた (Meyer und Suntrup (1987: XIII-XXIII))。この3角数の代表的な使用例としては、Shakespeare の *Sonnets* が、1から17までを順に加算した合計である3角数153の象徴性を用いて、ソネット連作自体が永遠の記念碑として3角形を形成する

ことが明らかにされている (Fowler(1970:183-97);Roche(1989: 418-24))。特にこの153という数は「ヨハネによる福音書」21:11で語られる「ペトロの網にかかった魚の数」としてとりわけよく知られた伝統的象徴として数であり、後述するように17に還元して解釈された。

Id 45でも、語り手の詩が恋人 Idea の名を永遠化する「記念碑」“Trophies”となることを、その序数に象徴させている。

Since she disdaines to blesse my happie Verse,  
The strong-built Trophies to her living Fame,  
Ever henceforth my Bosome be your Hearse,  
Wherein the World shall now intombe her Name:  
(5-8)

数45は $5 \times 9 = 45 = 4 + 5 = 9$ と計算できることから循環数9として、また1から順に9まで加算していった合計、すなわち底辺を9とする3角数としてともに数9に還元される。さらにここでは、trophy の語自体が配置されている詩行の序数6も1から3までを順に加算した合計として、完全性を表す3角数であることから、「詩行の序数によるシンボリズム」が重ねられており、それによって循環数9のシンボリズムが補完されている。語や内容をそれが書かれている数的位置に象徴させるのも伝統的な数のシンボリズムの使用法の1つである。実はこの3角数6のシンボリズムの使用は、同数を序数とする Id 6からも確認される。このソネットも詩による恋人 Idea の永遠化がテーマとなっており、恋人は「我が不滅の詩の中で永遠に生きる」“Still to survive in my immortall Song”(14)と詩を結ぶ。この内容を連作全体の中で占める同ソネットの序数が象徴する。

この Id 45と同じように、詩の中に実際に trophy の語が登場する Id 55においても3角数55のシンボリズムが使用されている。ここで語り手は、自身の詩が恋人 Idea の「聖なる瞳に捧げた記念碑」“Trophies to thy Sacred Eyes”(12)であるとし、その内容をソネットの序数に象徴させている。数55も1から10までを順に加算した合計として、10に還元して解釈される、完全性を表す3角数である。この3角数55は、先に見た Shakespeare の *Sonnets* にも用いられており、3角数153のシンボリズムによってソネット連作全体が3角形を形成することを示す目印として機能する。また Samuel Daniel(1562-1619)の1594年版 *Delia* においては、そのソネットの総数として用いられ、詩集全体が3角形をつくるものとする中で、「恋人を永遠化する記念碑」“the Trophies”(50)としての詩集を象徴する (Roche(1989: 343-79)) (1)。

このように、そのどちらにも3角数のシンボリズムの使用が認められる Id 45と Id 55との位置関係に注目してみると、両ソネットの間には9つのソネットが存在し、尚かつ Id 55は最終の Id 63から逆に数えて9番目に位置していることが分かる。この配置に加えて、3角数がその解釈の際に底辺を構成する数に還元されることを考慮すれば、Id 45と Id 55で形成される2つの3角形はそれぞれ9と10を指示することになる。このように数9に3(=3角数)と10が重ねられていることには、Id 18の内容が反映されており、恋人 Idea が「9を10にする1」、完全なる3(三位一体)を反映



する真の9であることと同時に、真の詩神である恋人 Idea (=9) によって詩が完全性 (=10) を与えられていることが示されていると言えるかもしれない。

その他の循環数9を序数とするソネットでは、その詩の中で数9に直接言及するか、数9で象徴されるものを登場させる、あるいは問題とするものを9つ数え上げることで、そのソネットの序数が循環数9すなわち9を指示する数であることを示す。

Id 9では、語り手が「はじめて愛の狂気に陥ってからもう9年が過ぎている」“Tis nine yeeres now since first I lost my Wit”(11)とされる。愛を狂気と同一視し、数9のシンボリズムを結びつけている点に関しては後述するので別として、ここではソネットの序数に合わせて詩の中にその数表現を配置している点からも数9が強調されているだけではなく、それによって Dante と Beatrice の関係と同様に、恋人に数9が関係づけられていること、逆に言えば数9が恋人ないしは語り手の愛を象徴する数であることが示唆されていることに注目すべきである。

Id 27 ( $9 \times 3 = 27 = 2 + 7 = 9$ ) では、語り手は、自身の成就しない愛に関して自問自答する。8行目までで自身の愛の報われない現状を、その原因がどこにあるのかという6つの問いを自らに投げかける形で訴え、9行目以降でその答えとして自身の愛が「真実のものであること」、「誠実なものであること」、「神の計画・意志・原理に背く、邪なものではなく、清純なものであること」という3点に集約してその正当性を主張することで、恋人のつれなさを告発する。自身の愛に関する問いと答えの総数が9つであり、9行目以降にその愛の実体が語られることに恋人 Idea に対する愛が9で象徴されており、さらにその9が完全なる3を表すことが、答えの数である3に示唆されていると考えられる。 $9 \times 4 = 36 = 3 + 6 = 9$ としてその序数が9に還元される Id 36では、語り手は9つの対象に願をかけて、つれない恋人への恋の成就を愛の神キューピッドに対して嘆願する。その願掛けの対象が9つであり、5行目から13行目までの9行で列挙されることに語り手の恋、あるいは恋人が9で象徴されることが暗示されているが、その対象の中にもそれ自体で9に、あるいはその唯一の因数 ( $3 \times 3$ ) として9と結びつく3に関連するものが含まれている。7から8行目で挙げられる、冥界の王ハデスの妃「プロセルピナ」は1年の3分の1を冥府で、3分の2を母デメテルや他の神々と暮らすこと、その母デメテルがハデスに連れ去れた娘プロセルピナを探して地上を彷徨う日数は9日間であることなどから、彼女には数3と9が関係する。5行目で語り手が願をかける「ステュクス川」は、死者たちをハデスに閉じこめるべく、そこを9重に取り巻いている。加えて、7行目の「その名にかけて」として言及される女神ヘカテは、地上ではダイアナ、天上ではルナ、地獄ではヘカテというように3つの名前と呼ばれた。

最後の Id 54 ( $9 \times 6 = 54 = 5 + 4 = 9$ ) では、Id 45等と同様に「詩による恋人の永遠化」“Which Name my Muse to highest Heav'ns shall rayse”(13)が歌われるが、その際、語り手は自身の詩を「我が魂の恋人 Idea という神への献げ物」“My Soule's Oblations to thy sacred Name”(12)であるとし、「香」“the Incense”(9)と「熱意、希望、誓い、賛美、祈り」“My Zeale, my Hope, my Vowes, my Prayse, My Pray'r”(11)の6つのものにたとえる。こ

の6つの献げ物を恋人に受け取ってくれるように求める訴えが第9行目から開始されることから、ここにこの「詩行の序数による数秘術」を絡めてソネットの序数54を生成する因数6と9が提示されていることになる。

このように Idea 本篇は循環数9のシンボリズムによって構成されており、本篇のソネットの総数63は循環数9の倍数として数9へ回帰する、すなわち恋人 Idea を象徴する数9に集約されるわけである。さらに、詩集全体としては序詞のソネットが含まれていることから、そのソネットの構成を数式化すれば  $1 + 9 = 10$  となる。この構成には、恋人 Idea が「9を10とする1」すなわち完全なる3を映す9、真のアイデアを映す鏡であることが表されており、また、本編9に序詞の1を加算して10とすることで、そのような恋人を詩神として彼女への愛を歌う詩集自体に完全性を付与することになる。

## 2. 円環と数のシンボリズム

Dante の場合と同様に、Drayton の Idea においても恋人が完全なる3＝三性を表す9で象徴されていることは、Id 18で「詩神・賢者・天使」の三位一体という形で示唆されていたが、それは、恋人の名前 Idea に直接言及している箇所が全体で3回、すなわち Id 32の14行目の“*That faire Idea*”, Id 39の14行目の“*my divine IDEA*”, Id 53の2行目の“*my faire IDEA*”として登場することにも示されている。この3つのソネットの3番目に当たる Id 53においても「汝の女王」“*thy Queene*”として恋人 Idea を9行目に配置することで、数9が恋人を象徴することが示唆されているが、詩集全体として実際にその名前に言及する回数が3回であることは、恋人を象徴する数9が神性の単一性を表す数3と同一視されていることを示唆すると同時に、翻って数9のシンボリズムの意味を逆照射していると言えよう。

例えば、Spenser の *Amoretti*(1595)にもほぼ同一のソネットが2つ登場し、数秘術の目印となっているが (Fowler(1970:180-82))、上の3つのソネットを眺めてみると、Id 32と Id 53はともに同一のタイトル“*To the River Ankor*”をもち、どちらのソネットも彼女の住む町とそこを流れる川を賛美するという形で、恋人 Idea を称えることを内容とする。加えて、Id 32の結びのカプレット“*Ardens sweet Ankor, let thy glory bee,/ That faire Idea onely lives by thee*”が、ほぼ同じ形で Id 53の冒頭の2行“*Cleere Ankor, on whose Silver-sanded shore,/ My Soul-shrin'd Saint, my faire IDEA lies*”に繰り返されている。このほぼ同じと言える詩行の繰り返しは、内容・題材・タイトルの同一性と相まって、両ソネットの連続性を示唆し、「詩行・押韻の繰り返しの円環のシンボリズム」を想起させ、この2つのソネットが円環を構成しているという印象を強く与える。

このことは、Id 32と Id 53が結合すると考えた場合に、そこに含まれるソネットの総数22のシンボリズムからも裏付けられる。数のシンボリズムの伝統において重要な聖数の1つである22は、「宇宙の鏡像」と見なされたヘブライ語のアルファベットの文字数であり (Lurker(2000:138))、それを表して「詩篇」第119篇では、全22連の各スタンザの冒頭にヘブライ語のアルファベットを順に割り振る「アルファベットによる詩作法」がとられており、Hieronymus(347-419/20)は旧約聖書を全22巻と考えた (Meyer und Suntrup (1987:676-78);



Curtius(1990:505-6); Røstvig(1994:38-39,139,147)) . このようなことから、数22は「神が世界を1つの秩序だった全体とした創造の行為・原理」を象徴し、また「知の総体・完全性」、「循環性・円環」を表す。この数22の象徴としての意味が、神のアイデアを映す真の鏡である恋人 Idea を象徴する「円環」をつつ Id 32 と Id 53 が形成していることを強く示唆するとともに、その円環のシンボルリズムを補完する。

この恋人 Idea を象徴する「円環」に、恋人の名前の登場する3つ目のソネット Id 39 は内包されているわけであり、同ソネットの Id 32 と Id 53 との位置関係が数のシンボルリズムを発揮し、この「円環」の存在と意味を補完する。Id 39 は Id 32 から数えて8番目に当たり、Id 39 から数えて15番目に Id 53 は位置する。ここに現出する数8には数の寓意的解釈の伝統からすると、単一性への回帰、洗礼、永遠、復活・再生、調和等の意味があり (Meyer und Suntrup(1987:565-80); Schimmel(1993:156-63))、五芒星を表す5とともに八芒星として聖母マリアを象徴する数でもある (大木(1999: 308))。一方、数15は現世から永遠への、旧約から新約への段階的昇華、「神へと上昇する15段の階梯」、魂の昇華を表す (Meyer und Suntrup(1987:654-58))。このように数8と15のシンボルリズムによって、Id 39 はその中間にあって Id 32 及び Id 53 の連続性・結びつきを指示する。

視点を変えて、Id 39 を中心としてその前後を見た場合、それぞれ7個 (Id 32 から Id 38) と14個 (Id 40 から Id 53) のソネットが存在することになるが ( $7+1(=Id\ 39)+14$ )、その比は1:2という協和音程をつくる比率「ディアパソン (2:1)」となる。この音楽的調和の比率は神の被造物である宇宙の調和を表すと考えられた (Heninger(1974: 100, 156-58, 179))。また、「宇宙」を表す22 (=ソネットの総数) の中に、宇宙の調和を示す2:1の比率が成立するということは、やはり「宇宙の調和」を表象するものである「ピュタゴラスの八弦琴」を連想させ (Heninger(1974:97))、ここにも数8が暗示されているとも思われてくる。このように恋人 Idea に「宇宙の和声」を奏で、完全なる調和を表し神的計画を映す宇宙の円環のイメージが重ねられることから、恋人の名前に言及するソネットが、「恋人 Idea の円環」を形成していることが理解される。

「円環」(象徴としての円・球を総称して)とは神・完全性・永遠を表す古代からの伝統的象徴であり、神を映す被造物の鏡である宇宙も「円環」で表象された (Poulet(1966); Lurker(1991))。ルネッサンス期の正統的な宇宙像によれば、宇宙は、地球を中心として、惑星の天球、恒星の天球、「第一動者」の天球の順に同心円状に層をなす1つの球体と考えられた (Heninger(1974:122-24))。すなわち、上記の3つのソネットが数のシンボルリズムに補完されてつくる円環は、恋人 Idea の完全性を表すことに奉仕して、彼女が神のアイデアを映す真の鏡であることを象徴し、数のシンボルリズムの次元で言えば、恋人 Idea を象徴する数9が神性の三一性を映す数3に還元されることを表す。

以上の3を映す9としての恋人という観念は、Id 30 及び Id 17 においてまさしく「鏡」のイメージを用いて表されている。

Id 30 は、古代ローマのかまどの女神ウェスタにまつわる伝承を材とする。女神ウェスタを祭る円形の神殿

には聖火が燃えていたが、その火を彼女に仕えるウェスタリスという6人の女祭司が守っていた。この6人は6歳から10歳の処女で、10年ごとにその役割を変えながら合計30年女神ウェスタに仕えた。語り手はこの伝承に自身の愛を当てはめて、女神ウェスタを「我が恋人」“Thou art my VESTA”(13)とし、その「祭壇 (=器)」“a Vessel”(3)を「我が胸」“My Breast's the Vessel, which includes the same”(12)、その神殿を「我が心」“Thy hallow'd Temple onely is my Heart”(14)、燃え上がる聖火を「恋人への至純の想い」“My holy Thoughts, they be the Vestall flame”(10)、火をともし太陽を「恋人の聖なる瞳」“Thy blessed Eyes, the Sunne which lights this Fire”(9)とする。このように恋人への愛を女神ウェスタ崇拝にたとえて歌うソネットの序数を、その崇拝を象徴する数30とすることで、詩の内容をその序数に表象させていると言える。

さらに、「6人の女司祭ウェスタリス」“Those Priests”(1)が守る「祭壇」は「絶えずその方向を太陽に向けて固定されている」“Devis'd a Vessel to receive the Sunne,/ Being stedfastly opposed to the same”(3-4)とされ、「太陽の反射光が集まり」“On which the Sunne might by reflection beat”(6)、薪に天の火がともし、聖火が燃え上がるようになっている。Ploutarchos(c.46-c.120)は、ウェスタを祀る神殿の聖火の燃える祭壇が破壊された時、ウェスタリスが再点火するのに鏡が用いられたと伝えている (Baltrušaitis(1978:97, 103))。すなわち、この「太陽に向けられた祭壇」とは、聖火の燃える祭壇・神殿であると同時に、太陽光線を集めて薪に火をつける「鏡」であると言えよう。加えて、先の Ploutarchos に見られるように、古く太陽が神を映す鏡であると考えられたことを考慮すれば (Baltrušaitis(1978:71))、第9行目で「火をともし太陽」と同一視される「瞳に代表される恋人」も「鏡としての太陽」であると考えていい。つまり、現世において神を映す鏡であるという点で、ウェスタの祭壇と恋人 Idea が対応し、それを数のシンボルリズムの次元で言えば、数9 (=9行目の「瞳に代表される恋人」)が数3 (=3行目の「祭壇 (=器)」)に一致することになる。

この数のシンボルリズムは、直接恋人を「鏡」にたとえる Id 17 において、その序数17の象徴としての意味とともにより明確なものとなる。ここでは3行目に恋人 Idea が「その中に卓越した資質なるものがすべて備わっている人」“One, in whom all the Excellencies be”として配置されており、第4行目から6行目までの3行で「天が自らをそこに映していると思える鏡」“In whom, Heav'n looks it selfe as in a Glasse”(4)、「この一点の曇りも無き鏡」“this Tralucent Glasse”(5)、「この清らかなる鏡」“this pure Mirroure”(6)というように「鏡」の語を3回用いて「鏡」にたとえられる (2)。

数17は、ピュタゴラス派の数論に従えば、悪徳ないしは不幸・不調和を表す数であるが (Fowler(1970:52, 176-77))、Augustinus 以降、3角数153を生み出す数として153と結びつけて考えられた。先に触れたように1から順に17までを加算した合計として3角形を形成する153は、Augustinus の解釈を起源として、17に還元し10+7と分析し、キリストにおいて甦り、霊を与えられる信者を意味する (Fowler(1970:189); Meyer und Suntrup(1987:814-16))。すなわち、この Id 17 で「鏡」と称される恋人に映し出されている「完全なる姿をした天上の至福」“In perfect humane shape, all heav'nly Blisse”



(12)は、そのソネットの序数が数秘術的に指示する3角数153で象徴されているのである。序数17にも詩の中で用いられている鏡のイメージが照射され、3角数としての3が反映されて、恋人が第3行目に位置すること、3行に3つの鏡の語を登場させていることにも、9で象徴される恋人 Idea は、真の神のアイデアの鏡としてその因数3を映していると言えよう。

ところで、このように数の寓意的解釈の伝統において数17が3角数153と強く結びつく、言い換えれば数のシンボリズムにおいて数17と言えれば数153を連想させることから、17が隠された3角数153として機能しているとすれば、3角数=3であると同時に9の倍数=循環数9でもある数を序数とするソネットは、Id 36 (=4×9=1から8までの合計)、Id 45 (=5×9=1から9までの合計)、Id 17=153 (=17×9=1から17までの合計)の3つとなる。ここにも真の3を映す9という意識の表明を見ることができる。

また、Idea 本篇の詩の総数を63とすることで、3角数を序数とするソネットはId 3, 6, 10, 15, 21, 28, 36, 45, 55の9つであるが、これに先の17=153を加えることができるとすれば、実際に3角数の総数は9から10となり、ここにもId 18の「10となる9」という数論が暗示されていると言えことになる。

ただし、3角数という観点からすると、ソネットの序数とは違う形で、3角数21と28が現出することになる。このソネット連作本篇の中でタイトルを与えられている詩の総数の21は、1から6までを順に加算していった合計であり、3角形を形成する完全数である。なお、タイトルを与えられているソネットの総数に関して付言すれば、Idea 全体としては序詞のソネット“To the Reader”が追加されることになり、その総数は22で、「恋人の円環」を構成するソネットの総数と一致することになる。また、先に見たようにId 32とId 5円環を構成する1つの詩と考えれば、その詩行数の総計は28 (=1から7までの合計)となり、これもまた3角数である。すると、Id 45とId 55において詩による恋人の永遠化を象徴する「記念碑」=3角形が trophies として複数であることが示唆されていたが、Idea に登場ないしは現出する3角数はId 17を含めた10個から12個となる。仮に、この場合でもその総数12が数のシンボリズムを発揮していると言える。数12は「宇宙の和声」を奏でながら、神を映す宇宙を表す数である (Heninger(1974:156))。数12もアイデアを映す、真の被造物の鏡としての恋人を象徴するのに相応しい。

さて、「恋人の円環」を構成するソネット群において象徴としての数8が現出するのを見たが、Id 17を9の倍数である153 (9×17)として循環数9を序数とするソネットに加えれば、その種のソネットの総数は7から8となり、数8が浮上してくることになる。振り返って、循環数9はIdea 本篇のソネットの序数として7回繰り返されていたが、9が恋人を象徴し、それを歌う本篇がこの回数に代表されるとすれば、Idea 全体の数秘術的構成は本篇9 (63=9) + 1 (序詞のソネット) = 10だけではなく、本篇7 + 序詞の1 = 8という数式にもまとめられることになり、ここにも数8が現れてくる。

### 3. 数8のシンボリズム

Fowler(1970)が、1619年決定版 Idea の本篇のソネ

ットの総数63に数秘術の使用を認めていることは先に述べたが、その傍証として、Idea Mirrour と題された1594年初版の数秘術的構成を取り上げ、そこに収められているソネットの総数を序詞のソネットを含めて「1 (序詞) + 51 (本篇) = 52」ととらえ、その総数に1年=52週という時間の数のシンボリズムが使用されていることを挙げている。Fowler(1970:176)は1619年決定版の数のシンボリズムの分析に際して、本篇のソネットの総数63のみを問題としているが、初版の分析の場合と同様に序詞のソネットを含めて「1 + 63 = 64」と考えれば、64は $8^2$  (=強化された8)であり、Idea 全体の詩の総数からも数8が現出してくることになる。詩の総数64が強化された $8 = 8^2$ として8に還元されるように、本篇63個のソネットの数的中心に位置するId 32の序数もやはり8の倍数として8に関連するが (8×4)、ピュタゴラス派の数論からすると数8、32, 64のどれもが「正義」を表す数であり (Fowler(1970:39,153n))、象徴としての意味の上からもこの3つの数は結びついていることになる。

Id 32は、恋人 Idea の名前の登場するソネットとして「恋人 Idea の円環」を構成する詩であり、その目印ともなっている詩であるが、それと同時に Idea 本篇の数的中心に位置して、中心の数秘術を発揮する (31 + 1 (=Id 32) + 31)。

16・17世紀の英詩のコンヴェンションの1つである中心の数秘術とは、強調・重視する思想・主張等を、文字通り詩の数的中心に当たる詩行ないしはスタンザに配置したり、詩をその中心からシンメトリーな構成にしようとするものである (Fowler(1970:62-88))。Id 32が発揮する中心の数秘術は、「恋人 Idea の円環」の存在を指示することと同時に、結論的に言えば、序詞を含めて64篇のソネットから成る Idea 全体が数8のシンボリズムによって構成されていることを示唆することにあると言えよう。

Id 32では、イングランドの諸地方を流れる、全部で13個の川が取り上げられ、その美しさ・名声が恋人 Idea の住むアーデンを流れるアンカー川と比較される。アンカー川以外の12の川は12行目までにそれぞれ1行ずつを割り当てられ、最終のカプレットでアンカー川が13番目の川として描写される。そのような詩行構成にも反映されているように、ここで川の比較という形で恋人を賞賛するために用いられている象徴としての数13は「12 (テムズ川等のアンカー川以外の川) + 1 (アンカー川)」として提示されている。「12 + 1」としてとらえられる数13のシンボリズム、言い直せば「13番目のもの」という象徴を数の寓意的解釈の伝統の中に求めれば、シャルルマーニュ大帝と12臣将、アーサー王と12人の騎士などに見られるように13番目の人物=先導者を表すが、とりわけイスラエルの12部族ないしは12使徒を率いる長としてのキリストを意味する (Røstvig(1994:150,182))。また、数13それ自体も、教会が主の公現日を13と結びつけたことからキリストを表す数と考えられた (Røstvig(1994:147))。キリストは誕生後13日目にして東方の三博士の前に、つまりは公にその姿を現したのである。すなわち、この13番目の人物としての象徴性が恋人 Idea に重ねられているわけであり、特にキリストとのアナロジーが成立することになる。翻ってそのためにも、アンカー川の描写には2行が



与えられていたのである。数2には中世からの伝統的象徴としての意味として、キリストによって与えられた2つの戒め「神への愛と隣人への愛」があり、その数2の持つキリストに関係する象徴性が13のシンボリズムを補完・強化しているのである (Hopper(1938:114); Schimmel(1993:54))。そして、その13番目の人物としての恋人という視点に立つと、確かに恋人 Idea は、序詞, Id 18, Id 54の3つのソネットのそれぞれ13行目に「我が詩神」“my Muse”として登場し、「詩行の序数によるシンボリズム」によって数13で象徴されている場合がある(3)。つまり、Id 32において、その序数の意味「正義」と、恋人に対して与えられた「13番目の人物」のシンボリズムが表す「キリスト」が1つに結合して示す象徴としての意味は「義の太陽」としてのキリストである。「義の太陽」としてのキリストとは、最後の審判の時の裁判官として再臨するキリストを指し、義人には救い・永遠の命がもたらされる (Fowler (1964:66-73))。この審判の後に第8番目の時代が始まるのであり、これもまた数8に関連している。キリスト教の伝統的歴史観においては、世界・人類の歴史を救済史ととらえ、1000年を1時代として区分し、「キリストの降誕と受難」を6番目とする6つの時代、それから第7番目の「安息・急速の時代」が訪れ、最後の審判を経て原初の生命に回帰する第8番目の「天上における栄光と永遠の時代」へ至ると考える (Hopper(1938:77-78); Meyer und Suntrup(1987: 450))。

そこで、まさしく数8が序数となっているソネットを見てみると、語り手はつれない恋人に対して、彼女の美しい顔かんばせを構成する個々の部位を取り上げ、その老いた姿を語ることで、今彼の愛に込めてくれないことを責める。その際に言及される部位は単純に数えて9カ所であり、今まで見てきたように数9によって恋人 Idea を象徴しているわけであるが、詩のテーマは恋人の若さと老い、現在と未来という「時間」の問題であり、このテーマを序数8が象徴する。時間と関連する数8の象徴としての意味は「永遠・単一性への回帰」、「数7に代表される人間及び人間的時間を越えた第8番目の時代」である。この Id 8に現出する数8のシンボリズムが、Id 32の中心のシンボリズムの意味を明確なものとしてくれる。事実、Id 17にも示唆されていたが、Id 60を代表として恋人が「太陽」として歌われる場合があることから(4)、恋人が「義の太陽」としてのキリストとの関連から浮上する数8の象徴性「永遠性・完全性」を与えられていると言えなくもないが、Id 32の中心のシンボリズムの力点はあくまで数8のシンボリズム自体の喚起にある。Id 8, Id 32 (8×4)、全体のソネットの総数64 (8×8) は数8によって結びつき、同数の象徴性をソネット集全体に発揮していると考えることができる。

最後の審判を経て復活して至る第8番目の時代、すなわちキリストに示されたような「愛における死を通しての再生・昇華」の観念は、“An Allusion to the Phoenix”というタイトルを持ち、まさに恋人を不死鳥にたとえて歌う Id 16にも暗示されているが、Idea に用いられていると考えられる、もう1つ別の数9のシンボリズム「英雄的狂気」から理解される。

Giordano Bruno(1548-1600)は、英国滞在中(1583-85年)に Sidney を中心とした文人グループと親しく交わり、*De gli eroici furori*(1585)を Sidney に献じた。この著作は、

ペトラルカン・コンヴェンションを用いて書かれた一連の恋愛詩と、その各詩が人間的愛ではなく、英雄的狂気としての神への愛をうたったものであることを説く注解から成立している。その中で、神への神秘的愛を「そのすべてが狂気という1つの名の下に集約される9つの盲目」として数9で象徴している (II, iv)。これに加えて、この盲目すなわち知ある無知としての狂気＝完全なる自己滅却・死を通しての神への昇華は、巻末に置かれた全9連から成り、第1連1行目を最終連最終行で繰り返す「円環詩」によっても数9で象徴される。この著作等を通して Sidney とそのグループを代表として英国へ導入されたものは、Bruno の哲学のみならず、それに伴う数のシンボリズムでもあったと言えるだろう。Idea におけるこの「英雄的狂気」を表す数9のシンボリズムの使用は、まずはまさにその数を序数とする Id 9に確認される。Id 9で語り手は、先に循環数の9の象徴性を問題とした際にも触れたが、「愛の狂気におちいってからもう9年が過ぎている」として恋人 Idea への愛を「狂気の発作」“this Bedlam”(9)と見なし、その具体的内容を第9行目以降で語る。このように狂気＝語り手の愛が数9に結びつけられ、ソネットの序数のシンボリズムを逆照射する。これは Id 57の9行目以降で、語り手の愛が肉体的次元を超えた魂の「幻視」“Ev’n as a Man that in some Trance hath scene/ More then his wond’ring utt’rance can unfold”(9-10)や「法悦」“That rapt in Spirit, in better Worlds hath beene”(11)に等しい「愛の狂気」“So must your prayse distractedly be told”(12)であるとされていることにも確認される。加えて Id 41でそのタイトルにもなっている「恋の狂気」“Loves Lunacie”の語が配置されている位置は第9行目である。また、語り手の愛がその最高形態としての盲目であり (Wind(1968:53))、数9で象徴されることは、Id 36で「盲目のキュービッド」“purblind Boy”(1)を登場させ、彼の愛する「プシュケ」“thine owne loved PSYCHES”が9行目に置かれていること、Id 48でキュービッドが9行目で盲目であるとされていることなどに見られる詩行数のシンボリズムによって示唆されている。

この数9のシンボリズムが表す「死からの再生」のイメージは、Id 49に暗示される「肉体の死による愛の浄化」にも読み取れるが、Id 61から最終の Id 63にかけてより明確なものとなっており、最後のソネットの序数が生命の最大の危機を象徴することは既に見た。対立物の一致の観念を軸として Id 62の全体に展開されるオクシモロンは、語り手の愛の絶望的な状況を強調する機能にとどまらず、「はじめて終わった時、はじめて始めたんだ／そのとき、休息からさらにはるかに旅をしたんだ」“When first I Ended, then first I Began,/ Then more I Traveld, further from my Rest”(1-2)に示されているように「終わりが始まるである」という観念を表している。これは Idea 本篇のソネットの総数63に象徴された報われぬ恋の苦悩の頂点、愛の死の危機ではなく、実は数9が示す「愛における死を通しての再生」を表しているのに等しい。

以上の数9のシンボリズム「英雄的狂気」によって代表される内容は、「第8番目の時代」＝「再生、または永遠・神性の単一性への回帰」を表す8の象徴性と一致し且つそれを補完し、その8の象徴性が序詞を含めた総ソネット数64＝8<sup>2</sup>に反映されて、循環数としての



9・完全なる3(三位一体)を映す9によって表象される恋人 Idea の永遠化を表すと言えよう。また確かにこのソネット連作本篇は、恋人 Idea と同じく数9によって象徴される「語り手の精神の真の姿、恋人への愛の真実」を写した「我が恋の物語」“My Loves storie”(Id 13)としてやはり循環数9の倍数として9を指示する63すなわち9によって象徴されている。しかしながら、「絶望しながら望みを抱く」(Id 62), また「愛の神に打ち倒されても、征服するのは愛の神だが、勝利するのは私だ」(Id 63)とする語り手の恋人への愛を歌うソネット連作は、「奇数を偶数とする恋人」という意味での Id 18 の数論に一致して、本篇の総数63という奇数に、序詞のソネット=1が加算されることで全体として64という偶数に変化するという点で、その64が指示する数8の象徴性によっても永遠・完全性を付与されていることになる(5)。

#### 4. その他の数のシンボリズム

以上, Drayton の Idea が数9及び8のシンボリズムを中心として展開・構成されていることを見てきたが、最後に、これまでに言及した詩も含めてその他のソネットにおける象徴としての数の意味と使用方法を検討することで, Idea における数のシンボリズムの実体をより明らかなものとしたい。

Kermode et al.(eds.)(1973:915)も指摘しているように, Id 61では9行目から最終行にかけてキリストの受難及びピエタのイメージを重ねて恋人との別れ・愛の崩壊の危機が語られているが, そのような宗教的イメージを展開する一連のソネットにおいて, そのソネットの序数等が数のシンボリズムを発揮する場合, それもとりわけキリストと恋人とのアナロジーを伴っている場合には, キリストに関連する象徴としての数が用いられている。

Id 32においてはキリストを表す数13のシンボリズムを介して宗教的イメージ, つまりはキリストと恋人とのアナロジーが現出させられるが, Id 33は心が恋人の姿が刻印されている, またそれが祭られている神殿であるという愛の宗教というコンヴェンションを枠組みとしていることで既に宗教的イメージを提示しているが(6), その序数もキリストを表す, すなわちキリストの地上での生涯を表す伝統的象徴としての数である(Meyer und Suntrup(1987:703-6)). このキリストに関連する数に恋人の完全性が象徴されるという点からすれば, Idea における数のシンボリズムの理解の糸口になる数論を提起する Id 18の序数も888と並んでイエスの名前 I H Σ O Y Σ のギリシャ語のゲマトリアによる数値であり, キリストを示す数である (I (10)+H(8)+Σ(200)+O(70)+Y(400)+Σ(200)=888; I (10)+H(8)=18) (Meyer und Suntrup (1987: 664, 846)).

キリストの奇跡のイメージを用いて恋人の賞賛を語る Id 35では, 5行目の「見よ この奇跡を, 汝ら, 信仰心のない者たちよ, 見よ」“See Miracles, ye unbelieving, see”という呼びかけを境として, 以下最終行までの9行で語り手に対して恋人が為した7つの奇跡「口・手・目・耳の傷害の癒し, 悪徳の矯正, 死からの復活, 邪悪な心の追放=祓魔」が挙げられる。ここに数5, 7, 9という数が浮上する。第9行目で「盲目の癒し」が取り上げられることは, 先の「英雄的狂気」を表す数9のシンボリズムの使用を示唆しているが, 既に見たように

9は3×3として三位一体を指す数でもある。数7は「マルコによる福音書」で語られる, 弟子と群衆の空腹を満たす2度の食べ物の奇跡:「5つのパンと2匹の魚」(6:38-44)と「7つのパンの奇跡」(8:5-8), あるいは「マグダラのマリアから7つの悪霊を追い払った奇跡」(「ルカによる福音書」8:2)といったようなイエスの行った奇跡に関連する数である。数5はキリストが受難の時に十字架上で受けた5つの傷, すなわち聖痕を指し (Meyer und Suntrup(1987:403-42)), その傷はまた例えば Francesco (1181/2-1226)などの信仰篤き人々の一部に現れ, 彼らに脱魂・幻視の体験をもたらすものであった。これらの愛の奇跡は, Id 60にあるように, 恋人の像と同様にやはり語り手の心の中に見ることができるとされる。Id 60の序数が時間を表す数(=60分)であることは改めて言うまでもないが, その意味を「私の心の中にある奇跡」“wonders in my Heart”(8)に暗示されているキリストと結びつけて考えれば, 箱舟に入った時のノアの年齢「600歳と2ヶ月」に関する Augustinus の解釈に見られるように (Hopper(1938:81-82)), 世界史における第6番目の「キリストの降誕と受難の時代」を表していると言えよう。その意味で序数60は, 語り手の愛がキリストの示す神の愛にも等しいほど, 比類無く純粋であることを象徴する。

実は, 先に取り上げた「恋人 Idea の名前が登場する3つのソネット」の1つである Id 39の序数もキリストに関連する意味を持つ数であり, 詩に宗教的イメージを与え, 恋人 Idea が完全なる数3(三位一体)を映す9であることを示唆することに奉仕していたのである。

Id 39で語り手は自身の愛を詩で歌うのに際して, 他の詩人たちが様々女神に訴えたり, その他の様々なものに祈願したりするのに反して, 「聖なる恋人 Idea」に呼びかけるのみであるとする。これは Evans(ed.)(1977: xxvi, 206)が指摘しているように, 当時の恋愛詩の手法(神話への言及等による詩の粉飾など)から脱却して, 心という神殿に刻印され, 祭られている詩神・詩の源泉である恋人 Idea の姿を唯一の詩作の材料としてそれを「写す」のみであるという Sidney と類似した詩法の表明である。他の詩人たちの呼びかけ・懇願の対象は5行目から13行目までの9行で挙げられる女神や祈願の対象は, 9つ(ただし, 第7行目の2つの地獄の川を, ブルゲトン川がステュクス川の支流であることから1つと考えると)数え上げられる。その中には「3の3倍の女神」“The thrice-three Muses”(7)のように直接的に, あるいは何の解説も与えられていないが, 先にも述べたように, 「ステュクス川」が冥界を9重に取り巻く川であるという神話的事実から間接的にそれ自体が9で象徴されるものも含まれている。これは取りも直さず祈願の対象が恋人 Idea を含めて9で代表されることを示していることである。ただし, 最終行に謂わば10番目の対象として恋人 Idea の名が挙げられることに, 彼女がこれまで見てきたように「9を10とする1としての恋人」という形で表される, 完全なる3(=三位一体)を映す9として象徴されることが暗示されており, それはこのソネットの序数39の象徴としての意味「キリストの十字架」(Röstvig(1994:188, 202n.20, 528))によって補完されている。

「聖なる恋人 Idea」への愛を歌う詩で, ただひたすらその恋人のみを詩神・詩の材として「その恋人に呼びかける」行為は, Id 35でキリストとの結びつきを与え



られていた「恋人の爲した奇跡」への言及とともに、その他のソネットにも登場する一連の宗教的イメージの中に位置づけた場合、詩の内容と相まって序数39の表す「十字架」の意味によって聖金曜日の典礼の1つ「十字架の崇敬」を連想させる。参列者全員がキリストの受難に示された神の愛の象徴としての十字架に対して、その前に跪き、接吻し、聖歌を捧げ、ひたすら崇敬と賛美を表す礼拝の行為は、聖俗の違いはあるものの、偏に恋人 Idea に呼びかける行為に等しいと言えよう。

その他の数秘術の使用例としては、Id 49 などのように詩の中で語られる内容を、その詩の序数が象徴しているものとして Id 40、Id 50 などが挙げられるが、Id 9 のように詩の中でその序数と一致する数に言及することで数のシンボリズムを現出させるのが Id 15 である。Id 40 で語り手は「その狡猾さのために地獄に堕ちて、必ず不成功に終わることになる、大石を山頂まで転がして運ぶという労苦を永遠に繰り返すシシュフォス」(13)や「ゼウスの妃ヘラに対する恋慕の罰として、回転する火の車輪につながれ、永久に苦しみつづけるイクシオン」(14)にたとえて、報われない恋の苦しみをうたう。その苦しみを詩の序数40の象徴として意味「浄化のための試練」(Meyer und Suntrup(1987:709-23))が強調すると同時に、それが愛の試練なのだと受け止めようとする語り手の意志、先に見た「死による愛の昇華」の観念を表す。

また、Id 50 は、死刑に定められた罪人を生かしたり殺したりする人体実験している医者がいることを取り上げ、愛の次元において語り手を生かしては殺すという意味では彼らと同じである恋人と比較して、その医者の行為が自身の医術の向上のためであるのと同様に、語り手に対する恋人の態度も自身の美の崇高さを誇示するためだけであると思われるとし、彼女のつれなさを告発する。その告発は、愛の苦しみからの解放つまりは愛の成就の希求であり、それが序数に象徴されていると言えよう。数50の伝統的象徴としての意味は、7周年(7×7=49)が満了した後の50年目の「ヨベルの年」という解放・恩赦の時、大安息日、また、後悔と赦免である(Meyer und Suntrup(1987:735-36); Schimmel(1993:256))。

一方、Id 15 では、その6行目に詩の序数と同一の数15が配置され、その数的位置とともに、また11行目に登場する数3と呼応してシンボリズムを発揮する。語り手は恋人 Idea への恋情がつのるあまりに、どうにかして彼女を手に入れ、思い通りにしたいという気持ちから絶望したり、自殺に駆り立てられたりしてしまうが、その謂わば恋の病とも言えるものを癒す薬を持っているという。その際、その薬は、「金銭や名誉に対する欲望などが無い」“That Gold nor Honour ne'r had pow'r to move”(4)女性のこころ・心臓を主原料として、「15歳になっても真実の恋人との結婚を望まない」“Nor at Fifteene ne'r long'd to be a Bride”(6)女性の涙と、「3度結婚していても処女性を重んじる、修道女のような女性の祈り」“... one thrice-marry'd's Pray'rs, that did bequeath/ A Legacie to stale Virginitie”(11-12)などが混ぜられているという。その薬の服用とは、恋人が現世的なものを超越した徳高き女性・霊的愛の対象なのだとすることを思い出させることで自身の愛を矯正しよう、あるいは自分に対して貞淑で貞節な女性像を想起することで、仮想の世界で自分を満足させようとする、加えて恋人は男女の

恋愛には無関心な女性なのだから諦めようと自身に言い聞かせることである。だが、その薬を服用しても病が治まらない可能性がある、「悪魔にとりつかれたように恋人の魅了に抗しきれない」“... , but thinke the Devill's in me”(14)と恋人のつれなさを嘆いて詩を結ぶ。15の象徴としての伝統的意味は「現世から永遠への、神への段階的魂の昇華」であるが、同時に包括的な概数としても一般的に用いられてきたことから、あくまで詩の中では「15歳」とは結婚適齢期を漠然として示しており、「3度の結婚」にしても、3は漠然とした多様性・多数を表す概数に過ぎない。ただし序数の示すシンボリズムの上で重要であると考えられるのは、ピュタゴラス派の数論からすると数3は言うまでもないが、15と6のいずれも3角数であるということである。3角数はその底辺を構成する数に還元されることから、15歳=5、6行目=3となり、15の登場する6行目自体においても、あるいは実際に言及されている3との関係においても序数15を成立させる因数が暗示ないしは提示されていることになる。このような形で詩の中の数表現によって強調され、本来持っているシンボリズムを発揮することになる序数15は、詩が「恋人への愛における苦しみと嘆き」を表層的な内容とする一方で、恋人が「真のアイデアの鏡」であり、語り手の愛が肉体的・現世的次元にとどまるものではなく、彼女を目指して精神的・霊的次元へ昇華するものであることを表す。

#### 註

- (1) Shakespeare や Daniel のようにソネット連作全体を3角数のシンボリズムによって構成しようという意図は、Idea 1600年版のソネットの総数66にも見られる。数66は1から11までを順に加算していた合計であり、3角数である。ただし、その底辺に当たる、すなわち66が還元される数11は伝統的に10より1大きく、12より1小さいことから「罪・悔悛」を表す数であると解釈された(Schimmel(1993:189-91))。因みに、3角数のシンボリズムには関係がないが、「詩による恋人の永遠化」のテーマは、Id 44やId 47にも確認される。
- (2) Id 17の4行目と同じ鏡のイメージは、Id 57の「自然がその完全性を恋人 Idea の中に見る」“You, in whom Nature chose her selfe to view,/ When she her owne perfection would admire”(5-6)にも登場する。
- (3) Id 32の直前に位置するId 31では、「我が詩神’my Muse’」は2行目に位置し、詩行の序数による数秘術によって数2の象徴性が恋人 Idea に付与される。このことはまたId 32で恋人の描写に割り当てられているカブレット=2の象徴としての意味が、13の象徴性を強化・補完していることを裏付けるものとも言えよう。キリストによって示された愛の2つの規定「神への愛と隣人への愛」は中世の信仰生活において活動生活と観想生活としてとらえられ、その調和が問題とされた。その生活の典型と考えられたのが旧約聖書のレアとその妹ラケル(「創世記」29:16)、新約聖書のマルタとその妹マリア(「ルカによる福音書」10:38-42)というそれぞれ対をなす女性たちであった(Hopper(1938:84, 175-76); Meyer und Suntrup(1987:114-15, ); Schimmel(1993: 54))。すなわち、Id 31では、愛を象徴する2の意味が恋人 Idea に重ねられていると考えられる。また、Id 25では「我が詩神’my Muse’」は10行目に配置され、Id 18の10行目の「我が美しき詩神’my faire Muse’」と同じシンボリズムを発揮して、10を



9 とする恋人 Idea がアイデアの真の鏡であることを表す。

- (4) *Id* 60 では直接恋人を「我が太陽」「my Sunne」(9)と呼んでいるが、例えば、「An allusion to the Eagles」のタイトルを持つ *Id* 56 で、語り手は太陽を見ても目が眩まず、直視できる鳥である鷲の子に「自身の愛」「my Love」(1)をたとえ、それが「我が太陽」「my Sunne」(5)・「我が魂の太陽」「my Soule's Sunne」(12)である恋人に向かって飛翔すると歌う。また、間接的な形で、「To the Shadow」と題された *Id* 13 の「我が詩は太陽としての恋人に照らされて生み出された影のようなものである」と解釈できる13行目から14行目 (Evans(ed.) (1977: 204)) に恋人が太陽であることが表されている。
- (5) *Idea* 1619 年版のソネットの総数に示されたシンボリズムにおける数8と9の象徴としての関連性は、聖数9を中心とした数論を展開している *Id* 18 が *Idea* 1594 年初版では第8番目に置かれていたことにも示唆されているようにも思われる。
- (6) この語り手の心=恋人を祀る神殿というコンヴェンションの使用例で、これまでに言及した以外に代表的なものとしては *Id* 57 の「我が胸は貴い聖遺物である恋人の神的美の面影を祀る聖廟」「And yet your Graces outwardly Divine,/ Whose deare remembrance in my Bosome lyes,/ Too rich a Relique for so poore a Shrine」(2-4)が挙げられる。

#### テキスト

Hebel, J. William, et al.(eds.) (1961) *The Works of Michael Drayton*. 5 vols. 1931-41. Cor. ed. Oxford: Shakespeare Head.をテキストとし、Evans, Maurice (ed.)(1977) *Elizabethan Sonnets*. London: Dent. を随時参照した。

#### 参考文献

- Baltrušaitis, Jurgis(1978) *Le Miroir: Essai sur une légende scientifique, révélations, science-fiction, et fallacies*. Paris: Editions du Seuil.
- Bruno, Giordano (1999) *Des Fureurs Héroïques*. Introduction et notes de Miguel Angel Granada. Texte établi par Giovanni Aquilecchia. Traduction de Paul-Henri Michel. Paris: Belles Lettres
- Butler, Christopher(1970) *Number Symbolism*. London: Routledge and Kegan Paul.
- Cirlot, J.E (1971) *A Dictionary of Symbols*. Trans. J. Sage. 2nd ed. London and Henley: Routledge and Kegan Paul.
- Curtius, E.R. (1990) *European Literature and the Latin Middle Ages*. Trans. Willard R. Trask. Princeton, New Jersey: Princeton University Press.
- Dante, Alighieri (1913) *La Divina Commedia*. Ed. and Annotated. C.H. Grandgent. New York: D.C. Heath.
- Dante, Alighieri (1924) *The Vita Nuova and Canzoniere*. Trans. Thomas Okay and P. H. Wicksteed. London: Dent.
- de Vries, Ad. (1984) *Dictionary of Symbols and Imagery*. 3rd rev. ed. Amsterdam: North-Holland.
- Fowler, Alastair (1964) *Spenser and the Numbers of Time*. London: Routledge and Kegan Paul.
- Fowler, Alastair (1970) *Triumphal Forms: Structural Patterns in Elizabethan Poetry*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kermode, Frank, et al.(eds.) (1973) *The Oxford Anthology of English Literature*. Vol. 1. New York, London and Toronto: Oxford University Press.
- Heninger, S. K., Jr.(1974) *Touche of Sweet Harmony: Pythagorean Cosmology and Renaissance Poetics*. San Marino, California: Huntington Library.
- Heninger, S.K., Jr.(1977) *The Cosmographical Glass: Renaissance Diagrams of the Universe*. San Marino, California: Huntington Library.
- Hopper, Vincent Foster (1938) *Medieval Number Symbolism: Its Sources, Meaning, and Influence on Thought and Expression*. New York: Columbia University Press.
- John, Lisle Cecil(1964) *The Elizabethan Sonnet Sequences: Studies in Conventional Conceits*. New York: Columbia University Press. 1938. New York: Russell.
- Lurker, Manfred (1991)『象徴としての円：人類の思想・宗教・芸術における表現』竹内章 (訳) 東京：法政大学出版局。
- Lurker, Manfred (2000)『シンボルのメッセージ』林捷・林田鶴子 (訳) 東京：法政大学出版局。
- MacQueen, John(1985) *Numerology: Theory and Outline History of a Literary Mode*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Mâle, Émile (1925) *L'Art religieux du XIII<sup>e</sup> siècle en France: Étude sur l'iconographie du moyen âge et sur ses sources d'inspiration*. Paris: Librairie Armand Colin.
- Mauray, Paul (1944) "Le secret de Virgile et L'architecture des Bucoliques." *Lettres d'Humanité* III: 71-147.
- Meyer, Heinz, und Rudolf Suntrup (1987) *Lexikon der mittelalterlichen Zahlenbedeutungen*. München: Wilhelm Fink.
- Nicolson, Majorie Hope (1950) *The Breaking of the Circle: Studies in the Effect of the "New Science" upon Seventeenth Century Poetry*. Evanston, Illinois: Northwestern University Press.
- 大木富(1997)「Shakespeare の Sonnets : 〈奇妙な遠近法〉と数秘術」『神奈川工科大学研究報告A人文社会科学編』第21号:79-89
- 大木富(1999)「象徴としての数：アンドルー・マーヴェルの〈アプルトン邸、フェアファクス卿に〉」『マージナリア：隠れた文学／隠された文学』村田・森田編。東京：音羽書房鶴見書店。291-313.
- Otis, Brooks (1964) *Virgil: A Study in Civilized Poetry*. Oxford: Clarendon Press.
- Poulet, Georges (1966) *The Metamorphoses of the Circle*. Trans. C. Dawson and E. Coleman. Baltimore, Maryland: Johns Hopkins Press.
- Røstvig, Maren-Sofie, et al. (1963) *The Hidden Sense and Other Essays*. Oslo: Universitetsforlaget.
- Røstvig, Maren-Sofie (ed.) (1970) *Silent Poetry: Essays in Numerological Analysis*. London: Routledge and Kegan Paul.
- Røstvig, Maren-Sofie (ed.) (1975) *Fair Forms: Essays in English Literature from Spenser to Jane Austen*. Cambridge: D.S.Brewer.
- Røstvig, Maren-Sofie (1994) *Configurations: A Topomorphical Approach to Renaissance Poetry*. Oslo, Copenhagen and Stockholm: Scandinavian University Press.
- Roche, T.P., Jr.(1989) *Petrarch and the English Sonnet Sequences*. New York: AMS.
- Schimmel, Annemarie (1993) *The Mystery of Numbers*. New York and Oxford: Oxford University Press.
- Shakespeare, William(1978) *Shakespeare's Sonnets*. Ed. W.G.Ingram and Theodore Redpath. 1964. London: Hodder and Stoughton.
- Sidney, Sir Philip(1962) *The Poems of Sir Philip Sidney*. Ed. William A. Ringler, Jr. Oxford: Clarendon Press.
- Spenser, Edmund(1989) *The Yale Edition of the Shorter Poems of Edmund Spenser*. Ed. William A. Oram, et al. New Haven and London :Yale University Press.
- Wind, Edger (1968) *Pagan Mysteries in the Renaissance*. 1958. enl. ed. London: Faber.